

# 第1章 中期中觀思想における言語 論的転回

## 1.1 『善説心髄』中観章の構成

このツォンカバの言語論的な議論を位置づけるために、『善説心髄』後半の中観の部分の科段を挙げておこう<sup>(1)</sup>。

- A2 『無尽慧所説経』に依る立場
- B1 『〔無尽慧所説〕経』に〔了義・未了義の区別が〕どのように説かれているかを提示する。
- B2 〔中観論師たちが〕その意味をどのように解釈しているか。
- C1 守護尊ナーガールジュナが『経』の意味をどのように解釈しているか。
- D1 縁起の意味が無自性の意味であると解釈していること。
- D2 それこそが聖言 (gsung rab) の意味の心髄 (snying po) であると賞讃したこと。
- C2 彼に従うものたち (後代の中観論師) がどのように解釈しているか。
- D1 中観自立派は聖〔ナーガールジュナ〕の原典をどのように解釈しているか。
- D2 中観帰謬派は聖〔ナーガールジュナ〕の原典をどのように解釈しているか。
- E1 人および法に自性があるかないかをどのように説明するか。
- F1 人および法において自性を否定するという〔他の立場との思想的〕相違を説明する。
- G1 自-相によって成立している自性を否定することが〔帰謬派の他の立場との〕違いであると説明する。
- G2 否定対象を特定し、〔それが〕どのように存在しないかを示す。
- H1 後天的な増益と先天的な増益<sup>(2)</sup>の捉え方を示し、それが存在しないことを示す。
- H2 声聞の〔三〕蔵に基づいても二無我をお説きになっているということの意味を説明する。
- F2 以上〔の帰謬派の特徴的思想〕に基づいて聖〔ナーガールジュナおよびアールヤデーヴァ〕の密意を解釈する独自のやりかたを示す。
- F3 この〔解釈の〕仕方が諸經典と矛盾する〔という非難〕を退ける。
- E2 勝義において成立しているものを否定する主要な正理は何か。

A1 が瑜伽行派の、A2 は中観派の了義未了義の解釈である。その A2 は大きく二つに分かれ、B1 で中観派の了義・未了義に関する立場が『無尽慧所説経』に基づいて提示され、B2 において中観派の論師たちの解釈が詳細に論じられる。そのうち B2C1D1 では、無自性の意味を縁起の意味として説く經典が了義であるというナーガールジュナの主張が述べられ、D2 では、それこそが釈尊の聖言の核心であると賞讃される。この二つの節は、ツォンカバがブッダパーリタの夢を見て中観の奥義を悟ったときに作ったとされる『縁起讃 (rten ' brel bstod pa)』を彷彿とさせる<sup>(3)</sup>。その

(1) 『科段』p.25。本章で取り上げる箇所は C2D2E1F1 の G1 と G2H1 であるので、それ以外の部分の下位項目は省略してある。

(2) kun btags dang lhan skyes kyi sgro 'dogs。後天的な増益とは、学説 (grub mtha ') 論者の見解 (lta ba) を指す。要するに特定の立場の哲学的見解。先天的な増益は、俱生の真実把握 (bden 'dzin lhan skyes) であり、全ての凡夫が生まれつき備えているものである。

(3) 『縁起讃』のフルタイトルは「一切世間に不共なる大朋友であり無上の教主である仏世尊を、深甚なる縁起をお説きになる方として讃歎する〔偈〕、善説心髄と言われるもの (sangas rgyas bcom ldan 'das 'jig rten thams cad kyi ma 'driś pa 'i mdza ' bshes chen po ston pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel ba gsung ba 'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa 'i snying po zhes bya ba)」であり、同じ『善説心髄』の美称を持っている。『縁起讃』著作の因縁はツォンカバの直弟子であるケドゥブジェの二つの伝記『信仰入門』と『秘密の伝記』に記されている。これらの伝記の基本部分はツォンカバの生前に書かれていたものと推定されるので、その内容はツォンカバ自身の承認を得ているものと思われる。この讃歎偈の著作年代が『聖ツォンカバ伝』(石濱裕美子、福田洋一、大東出版社、2008、p.93、p.165 注 150) に 1407 年と記しているのは、同名の『善説心髄』の執筆年との混同である。『縁起讃』の正確な執筆年代は不明ながら、1398 年頃と推定される(根本裕史「ツォンカバ作『縁起讃』研究(1)」『比較論理学研究』5、2007、p.129 注 1)。

奥義とは「中観派の不共の勝法」であったと思われる<sup>(4)</sup>。この偈も『善説心髓』のこの二節も、その「中観派の不共の勝法」を説くものに他ならない。

B2C2 は、D1 で中観自立派の主張が、D2 で中観帰謬派の主張が詳論される。帰謬派の節の中心的な部分は、人法二無我についての帰謬派の特徴的見解を述べる E1F1 である。その最初にツォンカバは、自立派の論師たちがみな、ブッダパーリタやチャンドラキールティと自らの二諦説に違いがないと考えているのに対し、チャンドラキールティは自らの二諦説と他の中観派の二諦説とが異なり、そして自らの説のみがナーガールジュナの真意の正しい解釈であると考えたことを指摘する。

では、その違いとは何か。ツォンカバはチャンドラキールティの『入中論』の自注を引用しつつ、次のように祖述する。

rang gi lugs dbu ma pa gzhan dang thun mong ma yin pa 'i gtan  
tshigs kyis don smra gnyis kyis don dam par smras pa rnams dbu ma  
pa 'i kun rdzob tu 'dod pas dbu ma 'i de kho na nyid mi shas par  
'jog pa 'i rgyu mtshan ni rang gi lugs la tha snyad du yang rang gi  
mtshan nyid kyis grub pa 'i chos mi 'dod la de dag ni de 'i steng  
nas 'jog pa sha stag yin pa 'i phyir ro //(LN, 64a34)

自説が他の中観派と共通でないことを論証因にして、实在論の二者(=経量部と唯識派)が勝義において主張している諸々のものを中観派〔にとつて〕の世俗において認めている者は、中観の真実義 (de kho na nyid) を全く知らないとして規定するのは次のような理由による。すなわち、〔チャンドラキールティの〕自説において言説においても自-相 (rang gi mtshan nyid)<sup>(5)</sup> によって成立している法 (=存在) を決して認めないのに対し、それら〔实在論者が勝義において主張するもの〕は、その〔自-相によって成立しているものの〕についてのみ指定されるものだからである。

二諦のいずれにおいても「自-相によって成立するもの」を認めないことが、帰謬派のみの、他と異なる独自の見解である。自立派と帰謬派の違いが、前者が自-相によって成立するものを言説において認めるのに対し、後者はそれを言説において「さえ」認めないことにある、という主張は、ツォンカバも繰り返し言及し、また一般にもツォンカバの帰謬派理解の根本的な命題とされている。しかし、以下本稿で検討するようにツォンカバ自身は、さらにその根拠を問い、あるいはここからより根本的な帰結を導き出す。すなわち、なぜ言説において自-相によって成立するものを認めないのか、またそれを認めない結果、どういうことになるのかを論じているのである。

<sup>(4)</sup>拙稿「ツォンカバが文殊の啓示から得た中観の理解について」『印度学仏教学研究』50-2, 2002, pp.834-828.

<sup>(5)</sup>rang gi mtshan nyid はサンスクリット語の svalaks.an.a のチベット語訳である。通常のチベット語文献の中では rang mtshan と略する方が普通であるが、ツォンカバはわざわざ冗長な表現を用いて「自らの特質」というチベット語としての意味を強調している。そのことを示唆するために、rang gi mtshan nyid とあるところは自と相の間にハイフンを入れて rang mtshan 「自相」と区別することにする。rang gi mtshan nyid kyis という術語については後述する。また拙稿「自相と rang gi mtshan nyid」(『空と实在:江島恵教博士追悼論集』春秋社, 2000, pp.173-189)、「rang gi mtshan nyid kyis grub pa 再論」(『印度学仏教学研究』54-2, 2006, pp.1112-1105) および注 11 に挙げた吉水千鶴子氏の諸論文を参照。